

# 長畝ふるさと通信

【2013年10月号】

## ■ 25年産米稲作ダイジェスト

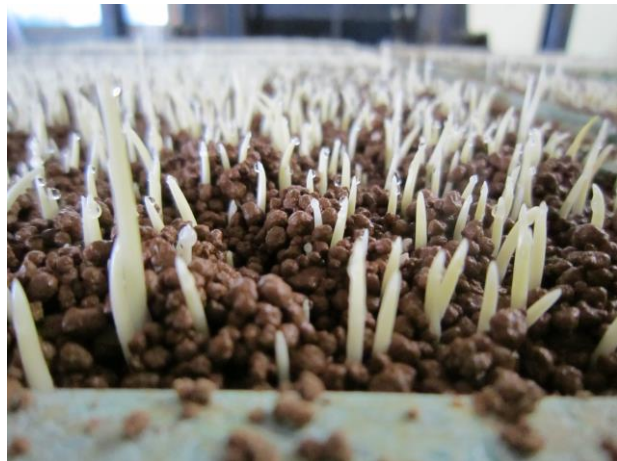
### ① 冬の田んぼでトキの足跡発見

25年初春、田んぼでトキの足跡を発見。昨年の大豊作に続き、今年も幸先の良いスタートを切ることが出来ました。



春になると田んぼのあちらこちらにカエルの卵塊が・・・たくさんのオタマジャクシが春の日差しで暖かくなった田んぼで元気よく泳いでいます。生き物たちにとっても待ち遠しい春でした。

4月に入ると種まきが始まり、いよいよ25年産米のスタートです。今年は約18000箱の播種をしました。種をまいて2日ほどで土の中から真っ白い芽が出てきます。育苗ハウスに移動して約3日、鮮やかな緑色の苗に姿を変えていきます。毎朝、ハウスに行っては苗の顔を見て水を撒き、暑くなればハウスを開放して風を入れ、寒くなればハウスを閉めに行き・・・の繰り返し。その間、田んぼには水が張られトラクターで代掻きをし田植えの準備は着々と進められます。



### ② 2週間の田植え三昧、生き物調査は大騒ぎ

5月は2週間、田植え三昧。朝から晩までず〜と田植機に乗りっぱなしでした。ピーカン天気が続いたおかげで顔は真っ黒に日焼けし、うちへ帰れば晩酌とともにまぶたがくつつき、気がつけばウグイスの鳴き声で目が覚めるといった状態でした。



トキの認証米といえば「生き物調査」です。今年も佐渡キッズ生き物調査隊の子供たちと田んぼの生き物調査をしました。写真の田んぼは子供たちが手植えをした田んぼで、無農薬栽培です。ドジョウやオタマジャクシ、ヒルやカメまで出てきて大騒ぎ。終わり頃にはトキが頭上を舞うお約束も……。この様子は今年も8月に東京大学で発表されました。

### ③ 終わりのない草刈り、追肥や防除は重労働



田植えが済むとそこから先は雑草との闘いです。刈っても刈っても力強く生えてくる畦草をこれでもか、これでもかと刈り倒していきます。佐渡の稲作農家はほとんど畦草に除草剤を使いません。出来るだけ農薬を使いたくないという配慮と、茶色く枯れた雑草は誰が見ても気持ちが良いものではないからです。

6月末には苗が肥料切れをおこすので、状態を見ながら追肥をします。20kgの肥料を背中にしよってあぜ道を歩いて散布するのは、これまた重労働。しかし、この作業が収量を左右するのでサボるわけにはいきません。



7月末、こしいぶきは「紋枯病」が発生しやすいので、仕方なく農薬で防除をします。薬剤は粉剤なのでマスクをしていても口や鼻から吸い込んでしまいます。決して体には良くありません。このほかにも8月上旬にはカメムシ防除のため農薬を散布します。大半はラジコンヘリで済むのですが、民家の周辺などヘリが飛ばないところは同様に人力で対処しています。

#### ④ かつて経験したことのない稲刈り

秋の収穫作業は困難を極めました。8～9月の長雨の影響で田んぼが乾かず、泥沼状態の圃場が多く見られました。当然コンバインもぬかるんだ場所へは近づくことも出来ず、大勢の人力での手刈り作業を強いられました。普段ならコンバイン1台で1時間もあれば刈り取れる田んぼに、手刈り人足10人、コンバイン2台を投入して半日がかかりになるところも…これでコメの値段は一緒ですからたまりません。いつまでも刈り取りが遅れると品質も低下することから、組合員の皆さん方も老骨にむち打って協力してくれました。おかげさまで早生のこしいぶきはオール1等米。



#### ⑤ こらからの農業は…

10月10日、すべての稲刈りが終了しました。こしいぶき2500俵、コシヒカリ4200俵、こがねもち380俵を収穫しました。ほぼ平年並みですが、JAの仮渡し金（JAが買取るお米の価格）が昨年より1俵当たり1800円も下がったのですからたまりません。政府はTPPをにらんでコメの生産調整を廃止して自由競争にしたいなどと検討を始めています。



これまでの国の農業政策が良かったとも思いませんが、競争をあおることが決して良いとは思えません。農業は食料生産業ではありますが、国土保全業でもあると思うからです。消費者の皆さんに支えられ、共に国土と食料を守っていく農業をこれからも続けていきたいと思えます。

**新米をお腹いっぱい食べて下さい。おかわりは自由です！**